

## 美術の窓 (151)

## 大浮世絵展

大和文華館館長 浅野秀剛

今、東京、両国の江戸東京博物館で、「大浮世絵展—歌麿、写楽、北斎、広重、国芳 夢の競演—」が開催されている。昨年11月19日に始まり、1月19日までのおよそ2か月の会期であり、その後、福岡市美術館と愛知県美術館に巡回し、5月31日に終了するというスケジュールである。この展覧会は、国際浮世絵学会創立50周年記念として2014年に開催した「大浮世絵展」の第2弾であり、前回と同じく国際浮世絵学会と読売新聞社の主催であるが、展覧会の内容は全く異なる。

前回は、浮世絵の教科書のような展覧会、すなわち、江戸時代初期から昭和初期まで300年余を通覧し、摺物を含む版画に肉筆画、版本など、浮世絵の全分野を視野に入れた展覧会だったのに対し、今回は、歌麿、写楽、北斎、広重、国芳の5人の版画作品に絞った。しかも、5人の絵師の作品数を均等にし、分野を限定し、その分野の名品とされる作品から選定したので、制作年代のバランスなどは全く考慮しなかった。つまり、歌麿の美人大首絵と優れた大判全身図、写楽の役者大首絵と大判全身図、北斎と広重の風景版画と花鳥版画、国芳の武者絵と戯画から、とりわけ魅力的な作品のできるだけコンディションの良い作品だけを集めたのである。その結果、副題の通り、「夢の競演」が実現した。

歌麿、写楽、北斎、広重、国芳の5人に絞ったのは、浮世絵師の評価と人気を現時点で測ると、その5人になる、と考えたからである。浮世絵師の評価と人

気という、思い出すのは大浮世絵師という言葉であろう。1919年、野口米次郎は『大浮世絵師』を岩波書店から刊行した。野口氏のいう大浮世絵師とは、春信、清長、歌麿、写楽、北斎、広重のことである。大浮世絵師はその後、一人歩きして浮世絵界を代表する6人として定着、「大浮世絵師」展なるものもしばしば開催されてきた。その間、大浮世絵師に入らない絵師を高く評価する人は、その言葉を苦々しく思ってきたことと推察される。

現在、人気を尺度に浮世絵師を測ると、大浮世絵師ではない歌川国芳の台頭が凄まじい。昨今の展覧会の集客力をみても、春信と清長をしのぐということに異論を唱える人はいないであろう。当然ながら研究者による国芳の評価も年々高くなっている。今回、春信と清長を外して国芳を加えたのはそれが理由であり、浮世絵史における春信と清長の重要度が低くなったからでは決してない。

今改めて『大浮世絵師』を見ると、何故その6人かという説明もなく、収録された順序も、歌麿、春信、清長、広重、写楽、北斎となっていて、時代順でも分野別でもなく、秩序がないのかな、と思わせるものがある。あまつさえ、「浮世絵の蒐集」「浮世絵に題す」「最後の浮世絵師芳年」という章も加わっている。幕末・明治の大蘇芳年を大浮世絵師と並んで論じているのである。つまり野口氏自身、大浮世絵師というのは、一つの見方にすぎないと言っているのだと思う。本展では、5人の浮世絵師の

版画だけを展示したが、100人の愛好者がいれば100通りの○大浮世絵師があつていいのはいうまでもない。

前回の「大浮世絵展」は、小林忠理理事長(当時)を中心とする実行委員会を作り、私もその一員として作品の選定と解説執筆を分担したが、今回は実行委員会を作らなかった。そこで、国際浮世絵学会理事長として、小林忠会長とともに作品の選定と出品交渉を行った。基本的な方針として、歌麿と写楽は欧米の美術館から、北斎・広重・国芳は日本の美術館や個人の方からお借りするという計画でことを進めた。現在、江戸時代の浮世絵版画の過半はアメリカおよびヨーロッパにある。それは、明治期を中心におよびただしい数の版画が輸出された結果であり、少し寂しい気もするが、それがあつて、浮世絵に対する世界的な評価が生じ、日本文化を海外に伝える大使の役割を担ってくれたことは間違いない。特に歌麿と写楽については、良質の作品の多くが欧米に存在するため、日本にあるコレクションでは十分な作品を集めるのが困難だからである。その結果、歌麿と写楽は、アメリカのミネアポリス美術館、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、シカゴ美術館、ヨーロッパの大英博物館、ギメ東洋美術館、ベルギー王立美術歴史博物館、ジョルジュ・レスコヴァッチ氏と、日本の東京国立博物館に出品をお願いすることになった。これ以上望むべくもない豪華な陣容である。

名品展であるから、本展の実施に際し特別な収獲があつたかと問われれば、ほとんどないと答えるをえないが、それでも、二つ特記していいかもしれない。その一つは、「富嶽三十六景」と同時期に刊行された、北斎の中判風景画の代表作「千絵の海」10枚揃のなか

の「絹川はちふせ」である。展覧会では、中外産業株式会社原安三郎コレクションと千葉県立中央博物館蔵の2点出品されているが、原コレクション(図1)が、土手を下から上にぼかし上げる通常の摺であるのに対し、千葉県博蔵品(図2)は反対に土手の上から下にぼかし下げているのである。「絹川はちふせ」は5~6点現存しているが、千葉県博蔵品以外はすべて原コレクションと同じぼかし方である。「千絵の海」で、明確に異なる摺り方が確認されたのは初めてであり、その意味するところを考察する必要があるだろう。

もう一つは、保永堂版「東海道五拾三次」と同時期に刊行された、広重の「近江八景」8枚揃である。このシリーズは、本展に、中外産業株式会社原安三郎コレクションの8枚揃と中山道広重美術館蔵の8枚揃が出品されているが、中山道広重美術館蔵が通常の摺の揃物であるのに対し、原コレクションはごく早い初摺、というより試し摺のようなセットと判明したのである。8枚の多くに顕著な違いが見られるが、最も驚いたのは「比良暮雪」であった。中山道広重美術館蔵(図3)を含む、今まで確認した20余の現存作のすべての遠景に、白い巨大な山塊があるのに対し、原コレクション(図4)にはそれがない。広重と版元は、ごく早い時期にこの白い山塊を加えたことが判明したのである。その詳細をここで記すことはできないが、実に興味深い現象といわなければならない。

残念ながら、「大浮世絵展」は関西には巡回しないが、機会があれば是非ご覧になっていただきたい。



図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.209

令和2年 1月 5日

発行 大和文華館